今後の生産・供給に関して、お互いの思いを語り合う生産者の内山さん（左）とコープふくしまの根本さん。

福島の豚生産者からのメッセージ　～支え合い、共に進む

コープふくしまでは、2012年3月から、麓山高原豚※の取り扱いをスタートしました。東京電力福島第一原子力発電所事故の風評被害を乗り越えながら、前へ前へと歩みを進める生産者と、共に供給に取り組む方々の様子を取材しました。
（取材協力：JA全農福島）

「いきいきコープ復興応援デー」で展開

コープふくしまが、毎月11日に開催するいきいきコープ復興応援デー。この企画のひとつとして、麓山高原豚の生産者が顔写真入りでチラシや店頭のPOP広告で取り上げられています。その効果もあり、麓山高原豚は組合員の支持を集め、コープふくしまの豚肉供給高の3割を占めるほどになっています。コープふくしま店舗部畜産・惣菜SVの近内昌隆さんは、「麓山高原豚は、おいしいのはもちろんですが、放射線の検査をクリアしているため、安心して食べられるということも人気を後押ししています」と語ります。

内山さんの豚舎。

震災で、生産を断念する農家も

東日本大震災の被害で、もともと14戸あった麓山高原豚の生産農家は12戸に減ってしまいました。1軒は、津波で流され、もう1軒は東京電力福島第一原子力発電所から11㎞の場所にあり、避難地域に指定されたため、養豚を断念せざるをえなくなってしまいました。

福島県南部にある天栄村で麓山高原豚の生産を20年続けている内山福雄さんは、「震災で被災し、長年続けてきた養豚ができなくなった仲間たちの姿を見て、かける言葉が見つかりませんでした」と振り返ります。

自信を持って、おいしい食べ物を作り続ける

内山さんは福島の生産者の気持ちを代表して語ってくれました。
「どんなに努力して、おいしいものを作っても、福島県産というだけで、なかなか食べてもらえません。放射線量の検出がなくても、です。私たちの一番の励みは、おいしいといって食べてもらえることです。それが無くなった今、福島の生産者は、やる気を失いつつあります。それでも、私たちにできることは、安全管理をしながら、自信を持っておいしい食品を作り続けることです。その思いは、消費者の方にも、必ず伝わると信じています」

コープふくしま店舗部地産地消推進担当の根本茂さんは「農業の復活がなければ、福島の復興はないと思っています。コープふくしまに今できることは、事業を通した企画などで、生産者を支え、励ましていくことです。消費者、生産者が互いに支え合うという視点を持ち続け、まずは、私たち自身が生産者の思いを感じながら商品を利用し、全国へ福島の元気を発信したい」と話していました。

広いスペースをとって、麓山高原豚をアピール。

※麓山高原豚は、福島県内にある12戸の飼育農家で限定生産される、ＪＡ全農福島県本部が認定するブランド豚。認定されるには、指定された種豚であることと、仕上げの60日間に専用飼料を与えることが必要。現在、福島県内の指定された店舗や料理店でのみ取り扱われている。